

① 「玄鶴―長崎高商創立二十周年記念誌」―長崎高商同窓会編を読む

「明治38（一九〇五）年3月28日、文部省直轄学校中に我母校が認められてから正に二十年を経過した」。本書は母校同窓会が「同窓会誌第28号」として、大正14（一九二五）年5月に刊行したA5判一四四頁、長崎高商で初めての母校史（誌）である。まず本誌の構成を見る。冒頭に4枚の写真（母校々舎―開校当時と現在）（歴代母校長・五先生）（木村校長と母校勤続職員）（母校職員一同）を掲げる。本文記事の内容は「一部・同窓会」「二部・母校」「三部・学生生活」に大別され来賓・関係者の挨拶、教師・同窓生・学生の随想に併せ、各種の記録と図表統計が混然一体となった賑やかな構成になっている。

「一部・同窓会」では、明治42（一九〇九）年3月に呱呱の声を挙げた同会の（年次別発達史）を要約、（各支部の所在地・近況）を記し（卒業年次別同期会の回顧録）を賑やかに綴る。折込図表は（同窓生在職地方別一覽図）。同窓生一七七四名の中、二九七名が外地、東京二六六・大阪二五五・福岡一九五・長崎一六三名などとなっている。次に「二部・母校」では（新旧職員録）に続いて（校長・勤続職員11名の感想）（研究館・商品陳列館・自彊寮・各種文庫の現況）（長崎高商設立運動の経緯）などを収載、図表では（各年次入学志願者・入学者・大14年では一一四五・一八四名、6.2倍）及び（同窓生一八四四名の就職先比較表）などの母校黎明期の統計が紹介されている。

更に「三部・学生生活」では（学友会―語学・野球・庭球・端艇・水泳・剣道・柔道・弓道の現況）（会計収支）報告のあと、当時の（学生々活の現状）と題し、現役学生数百名を対象とした（趣味・嗜好・運動・購読新聞雑誌・下宿町・下宿代・学年次別年齢）などの統計調査が事細かに紹介される。末尾には付録として大正14年3月に両院を通過した「普通選挙法全文」と「同窓会規則二十一条」を掲げる。

「発刊の辞」は「二十年の歳月は敢えて長くは無いが、日に日を重ね月に月を積み、茲に集積した事実立脚した我母校に、社会が許した肯定・認容も之亦事実である。然し乍ら萬巻の書を蔵し、多数の卒業生を出し、校館建築物が如何に立派でも之等は形骸である。同窓生は対外的に学生は対内的に、恩師諸先生はその間に在りて、各々其地位に顧て当初の雄図に向かって敢て数歩を進められ、校風・学風を振作せられんことを。依って我同窓会と母校・学生に関する過去現在の一部を輯録して此の記念号とした」と宣言する。執筆者各位にも母校草創期の歓喜・期待が未だ冷めやらぬ時期の同窓会誌である。それゆえ此処には、母校の学務組織・教科課程に対する記述や、当時の政治経済情勢、海外雄飛に関する論議、後年の配属将校にみる戦乱の影も未だ見当たらない。将に「自由の天地・瓊の浦」が存分に回顧された記念誌なのである。この雑誌こそが、吾等が母校史の礎石を築いた貴重な先導役であったことに感銘する。なお本誌は長崎大学図書館・経済学部分館が唯一所蔵す合本「同窓会誌 No.22-30」に綴り込まれる一冊である。（04/7）

☆本書の周辺☆ 「こんな雑誌が、よくぞまあ、残っていてくれた！」母校史の始発点である。建学の精気が迸る雑誌である。学部図書館の同窓会誌合本の中で、母校史を読める歓び。

